

フリーデンスフェスト

この行事は、鳴門市ドイツ館が主催するものではありませんが、ドイツ館の職員が中心となって立ち上げたもので、今年で7回目を迎えました。職員はその間、大幅に変わりましたが、継続して開催されています。これまでここで詳しく書いたことがありませんでしたので、主任の川野佐知子さんに原稿を寄せてもらいました。

2月23日、フリーデンスフェストが開催されました。このイベントはドイツ館が事務局となり、収益金をドイツ国際平和村へ送金するチャリティイベントです。ドイツ国際平和村とは…ドイツ・オーバーハウゼン州にあり、1967年に世界各地の紛争で被害を受けた地域や危機的状況にある地域の子どもたちを助けるために設立されました。こうしている今も子どもたちは援助を待っています。



私たち徳島・ドイツ平和村支援の会は「ドイツ国際平和村の存在を知ってもらおう」ということを第一に考えながら実行委員会を重ねてまいりました。会場に平和村のパネル展を展開し、



DVDで紹介を行うことにより、質問をいただいたり話しかけられたり…大変ありがたかったです。中には熱い想いを語られるかたも。こんなあたたかい気持ちが広く伝わっていくことを願わずにはられません。

大ホールでは読み聞かせやコンサートが行われ「フェスト(お祭り)」に参加していただいた入場料、協力団体から売上の一部をあわせ、すべて平和村へ送金されます。大きな金額ではありませんが、すこしでも子どもたちが救われるのであれば、これ以上嬉しい事はありません。今回徳島県内の高校生がボランティアとしてたくさん参加してくれました。

若い世代の参加は大変心強く、この輪がずっとつながってほしいものです。そして平和村が存在する限り、継続していくことが大切だと感じています。

所蔵資料紹介

ドイツ兵捕虜関係史料のデータベース化について

ドイツ館には板東俘虜収容所を中心とする印刷資料のほか、オリジナル、複製を含めて多くの写真もあります。これらは一応すべて画像データとして電子化しており、外部からの希望に応じて資料を提供する際の基礎資料になっています。ただ写真について、テーマ毎の検索では私が着任するより以前の職員が20冊ほどのアルバムとしてまとめたものに頼っている面もあって、不十分なものであり、恥ずかしながらとても完成したデータベースとは言えません。

印刷資料に関しては、単なる画像データ化だけでは不十分です。特に書籍、冊子類は使われている書体が大抵の場合、古いドイツ筆記体であるため、転記、テキスト化することで研究者のみならず、一般の方も読みやすくなります。ドイツ館ではドイツ館史料研究会が中心となって電子テキスト化を行ってきました。その成果は板東俘虜収容所新聞の『ディ・バラック』と徳島収容所新聞の『トクシマ・アンツァイガー』の翻訳と原文で公開あるいは公開されています。ひき続き現在、松山収容所新聞『ラーガーフォイアー』のテキスト化と翻訳がドイツ館史料研究会の手で行われています。

これ以外についてもテキスト化の作業を少しずつですが進めているところで、できるだけ史料研究会のサイトにアップロードしたいと考えています。以前『エンゲル・オーケストラ』を公開しましたが、それ以降『板東俘虜収容所案内』、『第六中隊

の演劇、『第六中隊の過ぎし日々の影絵』および『板東の我々の体操』の電子テキスト化をすませています。ただしドイツ語のみです。さらに不完全ですが、音楽や演劇などのプログラム内容のテキスト化もある程度できています。

『板東の我々の体操』

これらの中で『我々の体操』に書かれている内容が非常に興味深かったため、その一部を紹介したいと思います。ちなみに、ここで「体操」と訳したドイツ語の "Turnen" には器械体操や組立て体操だけでなく、陸上競技も含まれていますが、この本で中心となっているのは鉄棒や平行棒、鞍馬などの器械体操です。

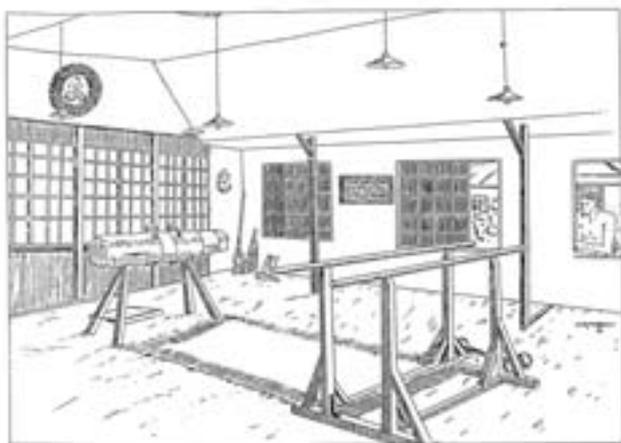


『板東の我々の体操』表紙

この本のあとがきに相当する個所で、印刷したのは20冊だけで、体操クラブに最後まで所属していたメンバーだけに配布されたことが書かれています。実際、この本にはメンバーであったオスカー・マイの署名があります。板東にはいくつかの体操クラブがあり、時期によって盛衰もあったことを初めて知りました。また、板東に来る前の三個所の収容所（松山、丸亀、徳島）では体操が盛んだったのに、板東ではさほど人気がなかつ



内部見開き（同書）



収容所体操場の内部のスケッチ（同書から）

た理由として、サッカー、ホッケー、シュラークバルやテニスなど各種スポーツに参加する人が多く、人気であったからと書かれています。収容所外の広大な運動場が多くの捕虜の活動の場として格好の所であったのでしょう。

さて、ここに書かれている中に2つの興味深い逸話があります。ひとつは、松江豊寿所長を補佐した副官の高木繁大尉のことです。1918年8月11日に収容所体操クラブが「体操の父」と呼ばれるフリードリヒ・ヤーンの誕生日にちなみ「ヤーン祭」という体操演技会を開きました。真夏のことゆえ夕方7時からの開催で、終了したのは午後10時でした。これは就寝時刻ですから、直ちに自室に戻らないといけないのですが、主催者のおもだった人たちが仲間の所有する小屋で語らっていた（ビールも飲んでいただことでしょう）ところを見回りの監視将校に見つかり、処罰を受けます。ことはそれで終らず、この催しを許可した高木大尉にも及んだのでした。問題の捕虜2人が高木の自室に呼ばれて、話合われたことが書かれているのですが、その内容があまり収容所側の人間と捕虜との会話とも思えません。



執務室の高木大尉とドイツ兵

高木は同僚の3人の将校から、捕虜に対する日頃の甘い対応をも含めてのことでしょうが、「高木大尉はドイツ人ですな。そんなことでは職を追われますぞ」みたいなことを言って厳しく非難されたと話します。そしてかなりショックを受けた様子で、副官でいられなくなるかもしれないと漏らします。これに対し捕虜のひとり、そう神経質にならず厚かましく臆せずやって下さいと言い、さらに日本語で「捨てる神あれば拾う神あり」と言います。これには意表をつかれたのでしょう、高木は机に突っ伏して笑ってしまいます。その後も捕虜は弱気になった高木にくじけず、「気合」でがんばって欲しいと説得します。結局2人には重ねて自室での謹慎処分を言渡されます。その後、タバコを吸いながら雑談するのですが、片や分らず屋の同僚たちの視野の狭さを嘆き、片や長年にわたる捕虜生活のつらさを訴えたということです。板東俘虜収容所での捕虜に対する人道的な処遇はつとに有名ですが、収容所サイドではこんな軋轢もあったのですね。それにしても捕虜たちは高木大尉をよほど頼りにし、また両者が信頼関係にあったことがうかがえる話です。

もうひとつは遠足ですが、従来ブッターザック大尉が責任者となって立案・引率した遠足が頻繁に行われたことは知られていました。しかし、それ以外に彼と高木大尉の許可があれば小



収容所の裏山を歩く捕虜たち

グループ単位の遠足もできたことが、この本に書かれています。ここで取上げるのは、もちろん収容所体操クラブの遠足です。1919年3月8日、朝からこぬか雨が降っていましたが、その内止むだろうと出かけます。目的地は山を越えて瀬戸内海の海岸ですが、雨は止むどころか強くなってきて、目的地に着く頃にはびしょ濡れになります。そこに1軒の旅館を見つけて入ったところ、彼らの様子を見た主人夫婦はすぐさま30着の「キモノ」を持ってきたので、それに着替えて濡れた服を火で乾かしたそうです。そして乾くまでの間、暖かい「サキ」(燗酒?)を飲み、仲間同士のお喋りを楽しんだそうです。こんな地元民との交流もあったのですね。



瀬戸内海で漁を見物するドイツ兵(左端)

板東の捕虜に関する卒業論文

前号で板東俘虜収容所での捕虜製作の印刷物を扱った卒業論文の紹介をしました。今年度も板東俘虜収容所について興味を持った大学生(福岡教育大学、木本有香さん)が遠足について次のタイトルの卒業論文を書いてくれました。

『板東俘虜収容所におけるドイツ兵俘虜の遠足及び海水浴についての一考察—遠足行程概略図の作成と検証—』

ここでタイトルにあるように行程の概略図を作成するとともに、その経路の検証を行うために実地調査もしています。その過程で従来知られていなかったことを発見しています。瀬戸内海沿岸の檜木にはドイツ兵捕虜が休憩できるような小屋があって、地元では「ドイツ小屋」と呼ばれていたこと、そこには井戸もあって飲料水を提供していたという地元の方の証言を記載しています。この檜木はドイツ兵捕虜たちが海水浴のために50回

ほど訪れた場所です。そこでは地元民たちが彼らを相手に食物や飲み物を売っていたことはドイツ兵捕虜の書き残したのから知られています。しかし休憩小屋までであったことは知られていませんでしたし、その具体的な場所まで分ったことは大きな成果です。

もう一つの発見はドイツ兵捕虜が設計したという言伝えのある民家です。もともとは農協(建築当時は信用購買利用組合だと思われます)の建物であったと言います。後にかなり手が入っているため、一見普通の民家のように見えるのですが、屋根の形状が周辺の家屋とは異なり、切妻の上半分ほどが斜めに切れ落ちた「半切妻」屋根になっています。これはドイツ牧舎などの設計をした元捕虜兵H.シュラーダーが描いたドイツ民家の上階部の図にも見られます。鳴門市史編纂室に照会してみましたが、残念ながら当時を伝える檜木関係の詳しい史料が残存しないようで、この伝聞しかないものの、かなり可能性が高いように思います。この民家(近藤家住居)は檜木の旧道沿いであって、近くを走る国道11号線からはよほど気をつけないと見えないため、筆者もこれまで気づきませんでした。



屋根に特徴のある近藤家住宅

ドイツ大使館付武官の来訪

昨年度、ドイツ大使館からグトー大佐が収容所跡地にある2つの慰霊碑を献花に訪れたことを第28号でお伝えしました。前は鳴門市の第九演奏会に合わせて6月だったのですが、今年



鳴門市長(左)と懇談するブッシュ大佐(中央)と随員

度は年が改まってから、大使館付武官のブッシュ大佐が随員のランカウ軍曹とともに献花に訪問されました。その後ドイツ館で泉理彦市長を初めとする鳴門市側と会談があり、慰霊碑を大事に守っていることへの謝意を表されました。

国際交流員のしごと

ドイツ館には以前からドイツ人の国際交流員がいるのですが、この館報では彼らが交代する時期に合わせて離任する人の挨拶と着任する人の自己紹介を掲載する程度でした。そこでその仕事にどのようなものがあるかを現在の国際交流員のロバート・テルシグに書いてもらいました。



ドイツからの来館者に説明をするテルシグ

基本的に仕事の内容は二つの分野に大きく分けられます。それは、ドイツ館関係の仕事と市役所関係の仕事です。まず、ドイツ館関係の事を紹介するなら、ドイツ館を訪問する外国人への対応があります。つまり、館内展示をドイツ語や英語で案内する事です。また、ドイツをはじめ、海外からの問い合わせの対応もあります。それは例えば元捕虜たちの親戚を探したりや学者の研究サポートなどです。

もう一つの分野としては鳴門市役所関係の仕事です。昔は姉妹都市であるドイツ・リュネブルク市への対応が中心でしたが、1990年代後半以降、ここでの国際交流が広がり、徳島県やニーダーザクセン州からの関係者をサポートすることもあります。そこでの多くの仕事としてはメールでの遣り取りや手紙の翻訳作業がありますが、使節団や訪問団体のための通訳作業やアテンドもあります。

上記のこう言った巨大な国際交流があるのに対し、草の根レベルの国際交流も仕事の一部です。その中で、ドイツ語を勉強している人向けのドイツ語教室がありますが、学校や市民組織から依頼に応じて講演を行うこともあります。他に元国際交流員のハンケルさんが始めた鳴門市やドイツ館での最近の出来事を紹介する「鳴門だより」というものがあり、現在の国際交流員が2か言語でインターネット上でブログとして続けています。

さて、こういう仕事内容の大まかな紹介があっても、朝出勤

したら、何が起こるか分かりません。前の国際交流員がいきなり係わって来た仕事としては、日本国外のコンサート、映画製作や本の翻訳もありました。実は、最近ドイツ語での映画のその字幕作成という興味深い依頼ができました。今度はどのような仕事出来るのでしょうか。

これまでの主な行事

- 11月3日(日)～11日(月) 中野慶子ろう工芸展
- 16日(土) 第4回笑っちゃう会
- 23日(土)～1月5日(日) 奥山実秋絵画展
- 12月14日(土)～15日(日) 第4回ドイツ館のクリスマスマーケット
- 1月1日(水)～15日(水) 前田博史巡回写真展「脈」
- 11日(土)～31日(金) 親善使節団写真展
- 2月20日(木)～3月31日(月) ドイツの環境事情を知ろう
- 23日(日) 第7回フリーデンスフェスト

9月までの主な行事予定

- 4月13日(日) 劇団らせん館公演
- 20日(日) ドイツ館のイースターまつり。
- 5月3日(土)～5日(月) 第11回ドイツワイン祭り
- 21日(水)～3日(火) 第九展(仮称)(内容未定)
- 6月7日(土)、8日(日) ドイツ館の鉄道会
- 7日(土)～18日(水) 鉄道写真展(仮)
- 7月5日(土) セタコンサート
- 8月3日(日) 第九の里コンサート
- 12日(火)～14日(木) 第10回ドイツビール祭
- 17日(日) 弦楽器が奏でるドイツ音楽
- 23日(土) こどものおながく館
- 9月未定 第7回ドイツフードメッセ



👁️ 編集後記

今年は第一次世界大戦勃発から100周年になります。これを契機とするイベントや展示会、研究者のワークショップなどがドイツや日本で開催されるようです。この大戦はとてつもない人数の犠牲者と広範囲にわたる破壊をもたらした戦争であるのですが、特に日本では第二次世界大戦に比べるとどうしても影の薄いのは否めません。そんな中ドイツ館ではこの大戦、特に中国青島(チンタオ)での日独戦争とその後の収容所での捕虜たちの実像をご紹介します。もちろん板東俘虜収容所が中心となります。